

生徒たちの人生を預かる 教師という職業に 生きがいを感じています

東京都立高島高等学校 数学科 教諭

貝瀬 はづきさん KAISE HAZUKI

新潟県十日町市出身。新潟県立長岡高等学校理数科卒業。2019年に東京理科大学理学部第一部応用数学科を卒業。中学校数学、高等学校数学・情報の教員免許取得。2019年4月より高等学校数学科教員として入都。2022年3月まで情報科教諭として都立秋留台高等学校に勤務。同年4月より数学科教諭として都立高島高等学校に勤務。両校とも水泳部顧問を担当。東京都高等学校体育連盟水泳専門部所属。日本水泳連盟公認競技役員資格取得。

都立高校で数学教員として教鞭を執る貝瀬はづきさん。今年度（2024年度）で東京都の教師となって丸6年。現在勤める都立高島高等学校は、貝瀬さんにとって2校目の勤務校。数学の教科指導をはじめ、生徒のために奮闘する日々を送っている。

生徒の様子を細かく観察し、個に応じた指導を心がけている。質問対応は積極的に引き受けるタイプだ。

「数学を苦手と感じる生徒は一定数存在すると思っています。数学という教科を学ぶ意義に触れながら、分かる喜びを感じさせられるよう努めています。まずは教育者が楽しそうに授業を展開することが大切だと考えます」と話す。

2校とも水泳部顧問としても精力的に指導している。

「生徒は大会や記録会の機会を積極的に与えて練習の環境を整えさえすれば、期待以上の努力をしてくれる子たちです。彼らのこれからが楽しみです」

貝瀬さんは東京都高体連水泳専門部にも所属。その縁で生徒たちを補助役員として関東大会に同行させ、ハイレベルな選手の泳ぎを見せることもできた。「私も高校時代にインターハイで補助役員を務めた経験があり、とても印象に残っています。同じ経験を生徒たちにもさせられて良かったです」

まだ若くフレッシュな印象のある貝瀬さんだが、言



葉の端々に、熱血教師の風格が漂う。そんな貝瀬さんの子どもの頃の夢は、実は教師ではなかった。

医師を目指すが挫折

貝瀬さんの高校時代の夢は医師になること。それ以外の選択肢は全く思い浮かばなかった。

叔父が医師であったこと、母が看護師だったことから医療の仕事には幼い頃からなじみがあったし、人の命を預かる医療という仕事に憧れていた。高校で医学部志望の友人が多かったことも、医師を目指す動機になった。

目指したのは国立大学の医学部のみ。1年目、第一



子どもの頃、台所の流し下の道具を全部引っ張り出しているところ。いたずらばかりしていた。



七五三の記念写真。貝瀬さんは3人姉妹の長女。



高校時代、体育祭のダンスパフォーマンスにて。貝瀬さん率いるチームは応援賞を獲得。

志望に不合格。後期日程試験で国立大学の理数系学部
に合格したが、「医学部でなければ嫌」と、その日の
うちに合格通知をゴミ箱に。「このことは今でも母に
『あれは悲しかった』と言われます」と笑う。

一浪して2度目の受験では、国立大学だけでなく
私立大学も受験したが、学部は医学部一択。結果は努
力もむなしく全滅だった。ところが、父親の機転で二
浪は免れた。「密かに父が東京理科大学のセンター試
験利用入試に願ってくれていたのです」

願したのは、数理情報科学科（現在の応用数学科）。
「私には理科よりも数学、それも純粋数学よりも応用
数学が向いていると父は見抜いていたようです。この
選択は正しかったと思います。私はオープンキャン
パスにも行ったことのない大学に入学することになりま
したが、理科大は私にはとても合っていて、充実した
4年間を過ごすことになりました」

水泳に打ち込んだ小中学校時代

「小さい頃は、落ち着きがなく、いつも走り回って
いるやんちゃな子どもだった」と貝瀬さん。新潟の田
舎育ちで、遊ぶところには事欠かなかった。



書道部の活動に没頭していた大学時
代。100回記念の展覧会で大きな
賞を受賞した。中央が貝瀬さん。

勉強はどの教科も得意
だった。人に言われて何
かをするよりも、自分か
ら率先して行動するほう



東京理科大学の学生間で恒例のイベント「チェ
ックシャツデー」には、皆、チェックシャツを
着て登校。前列右から5番目が貝瀬さん。

が好きで、小学校では、学級委員によく立候補してい
た。

がんばったのは水泳だ。小学校1年生からスイミ
ングスクールに通った。4年生からは全国大会を目指
す「選手コース」に。練習が厳しくなり、平日は水曜
を除く毎日放課後練習。週2回は朝5時半からの朝
練も。土日は午前・午後の2回。弱音を吐くことも
あったが、やめたいと思ったことはなかった。ところ
が、「高校受験を前にやめることにしました。嫌になっ
てやめたというよりは、友達はみな強くて全国レベ
ルの子もいるのに私はいつも上位に食い込めず、限界を
感じたからです。それが私にとって最初の挫折でした」

中学3年生の最後の試合では決勝に進出し、前半
は3位で泳いでいたが、折り返し後のラストスパート
で体力が続かず、結局最下位に。「悔しかったです
が、やり切った満足感がありました。コーチが私の努
力を認めてくれたことは今でも印象に残っています。
中途半端にやめず、やるだけやったことは良かったと
思います」

何にでも全力投球した高校時代

水泳で挫折した分、受験勉強をがんばろうと切り替
えた。この頃にははっきりと自分は理系科目が得意だ
と自覚し、新潟県立長岡高等学校の理数科を第一志望
に定めた。「県内屈指の進学校であり、私にとっては
チャレンジでした。水泳の成績が振るわなかったので
勉強でリベンジしたいという意地もあったと思います」

集中して勉強し、念願かなって推薦で合格。

「高校生活はとても楽しかったですね。制服がなく
自由な校風で、文化祭や体育祭などの学校行事も生徒
が主体。希望制の海外研修にも参加しました。自分が
企画したことを形にできるので達成感もあり充実した
日々でした」

ユニークなのは体育祭で行う1年から3年まで全



大学生の頃、理系女子学生を応援する「科学の
マドンナプロジェクト」のイベントに裏方とし
て参加。後列左端が貝瀬さん。



前任校で担当した学年の生徒たちと、卒業記念でモザイクアートを制作。コロナ禍で多くのイベントが中止になったため、思い出づくりとして企画した。

クラス対抗のダンスパフォーマンス。貝瀬さんは2年次にはダンスリーダーを務め3年次にはダンス長としてダンスリーダーたちをまとめる役を買って出た。

振り付けも練習のスケジュールリングもすべて生徒たちで。炎天下での練習の末、貝瀬さんのチームは応援賞を獲得。目の前のことに全力投球で取り組むのは貝瀬さんの一貫したキャラクターだ。

勉強はというと、高校入学直後の成績はクラス39人中33位。これはまずいと思って勉強を始めると、すぐに順位が上がった。それがモチベーションになりさらに勉強をすると、2年生の1学期にはクラスで5番に。「快感でしたね。勉強ってやれば分かるし、分かったら楽しい。順位という形で成果が目に見えるのも張り合いになる。それからすごく勉強をするようになりました」

貝瀬さんの勉強法は、まず教科書や演習問題を何周も繰り返すのが基本パターン。数学や理科のように書きながら理解したり覚えたりする教科は机に向かって勉強。その時間を捻出するために、他の科目は通学電車やお風呂にテキストを持ち込んで勉強。英語は通学中に教科書の音源が入ったCDを暗記するくらい繰り返し聞いた。「もともと努力をすることが好き」という貝瀬さん。とにかく何にでも全力投球なのだ。

大学では部活動に全力投球

浪人時代は上京し、予備校の寮に住み込んで勉強漬けの毎日を送った。努力は実らず、理科大に通うことになり、「最初はくさっていた」という貝瀬さんだが、すぐにもちまへの努力家魂に火がつき勉強に打ち込んだ。成績評価GPAの平均は4点満点中3.4点。

部活にも全力投球した。「大学に入ったら、高校でも所属していた書道部に入ると決めていました」。小学校4年生から習っていた習字は、もはや貝瀬さん



都立高島高等学校の水泳部員たちと記録会に参加。後列右端が貝瀬さん。

にとっては生活の一部だった。1年生のときから大きな賞を受賞するなど活躍し、2年生で副部長に。オープンキャンパスでは、書道パフォーマンスを企画して披露するなど、大学にも貢献していた。しかし、書道部は大学公認の部活動ではなく「届出団体」と呼ばれる非公認の団体だと知った貝瀬さん。「ちゃんとした部活動にしたいと思い学生支援課と交渉を繰り返し、私が3年生になったときに晴れて公認団体（部活動）に昇格。部室やロッカー、部費を獲得しました」

自ら率先して活動するキャラクターは健在だった。3年次には部長になり、積極的に活動する部活動として大学から表彰されている。

教師になるという選択肢

教職課程は、「とりあえず取っておくか」というつもりで履修した。3年次から教職の授業が一気に増え、ここが継続する人と断念する人の分岐点になる。貝瀬さんは、「自分には事務職や営業職、技術職も向いていない」と気づき、教員の選択肢を残すことにした。

最初は消極的な理由だったが、次第に教員が自分に合っていると思うように。「私は保育園から大学に至るまで、一度も嫌いな先生に出会ったことがなく、良い先生に恵まれてきました。それが教師になろうと決めた理由かもしれません」

教員採用試験は東京都で受験した。「新潟に帰ることも考えましたが、東京のほうが圧倒的に学校数が多く、幅広い経験ができると思いました」

採用試験に合格すると、通常は翌年の3月初めに配属の連絡が来るのだが、1月に打診の電話を受けた。赴任先が遠くて引越しが必要だったからだ。しかも科目は、数学科ではなく情報科だった。「情報科の免許も持っていましたが、なりたいのは数学の教員だったので迷いました」。しかし一度断ると後がないかもしれないと思い、辞令を受け取った。



高島高校に着任した年は高校合同説明会などでHPやSNSによる広報活動を実施した。中央が貝瀬さん。

赴任先は、エンカレッジスクールと呼ばれる、様々な理由で小中学校時代に十分に能力を発揮できなかった子どもたちの学び直しのために設置された全日制都立高校。

「複雑な家庭環境に育った子、発達障害、不登校など、課題をかかえた生徒たちが集まっていました。授業中に座ってられない子、勉強が苦手な子も多く、うまく指導できるのか不安でした。でも、救いだったのが、教員たちが皆年齢が近く、とても仲が良かったこと。授業中に何か問題があると他のクラスの先生が助けに来てくれるなど、助け合う体制ができていました。また、学校を良くしようという意欲に燃えて行動する仲間たちで、やりがいを感じていました」

教員の中で比較的若く、生徒たちと年齢が近かった貝瀬さんは、生徒たちにも好かれたようだ。「学校が一つの居場所になっているという生徒も多く、何時間もそういう子の話し相手になったこともあります。指導に悩むこともありましたが、私にできることは何でもやってきましたね。いずれ結婚して子どもを持てば仕事ばかりではなくなる。それまでは全力投球しようと、すべてのエネルギーを仕事に注いでいました」

初任校の仕事にはやりがいを感じていたが、情報ではなく数学の教員になりたかったので異動を希望。それがかなって、現在の都立高島高等学校に着任した。

「今の学校は、創立50年以上の伝統校。生徒たちはみな真面目で何事にも一生懸命。前の学校とは、ま

た違った環境で、違った楽しみがあり、生徒たちが頑張る姿に日々励まされています」と話す。この学校に赴任して2年。卒業して大学生になってからも「数学を教えてほしい」と訪ねてくれる子もいる。教師になって良かったと思う瞬間だ。

教師になった選択は間違っていなかった

「人生を振り返ってみると、思い通りとは言えないけれど悪くはなかったなと思います。自分がしてきた選択に後悔はありません」と貝瀬さんは言い切る。

「医学部には入れませんでした。浪人して1年間、苦しみながら必死で勉強した経験は無駄ではなかった。全力を尽くしたから、すっぱり諦められたのだと思います。水泳をやめたときも、自分なりにやり切って終わられたので後悔していません」

貝瀬さんが教師として大切にしているのは「達成感と感動」だ。「前任校は特に勉強で挫折した生徒が多かったのですが、彼らも『自力でできた!』という気持ちがあれば今後頑張る力につながります。コロナの影響もあり、何かに必死になるという経験ができずに高校まで進学してきた生徒も少なくありません。授業はもちろん、様々な教育活動を通してこれからの社会を生き抜く力を育成していきたいと思います。

私は、人の命を預かる医師という仕事に憧れました。医師にはなれず教師になりましたが、教師はその一言一言が子どもたちの人生に大きな影響を与える仕事。生徒たちの人生を預かっているという点では医師と共通しています。教師になったのは、たまたまのようで必然だったのかもしれません。教師になって良かったなど今は思いますね」

結婚後2024年7月に出産し、現在は育休中。しばらく仕事を離れるが、教師としてやりたいことはたくさんある。

「強い印象を残さなくても、『あの時、私のために一生懸命になってくれる先生がいたな』と思い出してもらえる、そんな先生になれたら嬉しいです」

取材を終えて

やると決めたことには一生懸命取り組み、必ず結果を残す貝瀬さん。お風呂場でも勉強する根性には脱帽。育休中も種々の資格取得を考えているとか。子育てを経験を経て、さらにパワーアップして現場に復帰することだろう。

(フリーライター/石井栄子)